The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	経験はいかにして表現へともたらされるのか : M.フリッシュの「順列の美学」
Author(s)	葉柳, 和則
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49113
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【51】

氏　　名	葉　柳　和　則（は　やなぎ　かず　のり）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２３１０　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**経験はいかにして表現へともたらされるのかー M. フリッシュの「順列の美学」ー**
論文審査委員	（主査） 教　授　林　　正則 （副査） 教　授　市川　　明　　准教授　三谷　研爾

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、20 世紀スイスを代表する作家マックス・フリッシュ（1911-1991）が、60 年に及ぶ著作活動において一貫して中心的な課題として掲げた問い：「私とは何なのか？」、「私の経験はいかにして表現へともたらせるのか？」にどう答えようとしたかを、彼の美学思想を手がかりに、初期から晩年に至るさまざまなテクストの検討を通じて究明しようとした論考である。全体は、まえがき、問題設定、２部からなる本論、結論、参考文献から成り、A4 判 372 ページ（400 字詰め原稿用紙換算で約 1,120 枚）に及ぶ。

第１部では、フリッシュの「順列の美学」が論じられている。理論的なものから意識的に距離を置いた作家フリッシュに、体系的な美学論は存在しない。論者はしかし、作品の背後に確かに存在するはずの「暗黙の美学」に注目し、40 年代の『期待の芸術』(1941) から 50 年代の『日記 1946－1949』(1950)、さらに 60 年代の『シラー講演』(1965) に至る評論、エッセイ、講演、手紙などの多様なテクストを読み解き、そこに散在する美学的な考想を整理し、「順列の美学」(『シラー講演』の中でフリッシュが掲げた「順列のドラマトゥルギー」を敷衍し論者自身が名づけたもの) を再構成する。論者はそれを、「語る」ことによって逆に抑圧・排除された「語りえないもの」としての私の「経験」を、ありえたかも知れない別様のさまざまな可能性によって umschreiben する（書き換える/輪郭をなぞる）こと、すなわち複数の虚構の物語の「順列」Permutation によって「語りえないもの」の固有性を毀損することなくそれを表現しようとする美学であり、根幹に徹底したリアリズム批判を内包する美学であるとする。論者はさらに、この「順列の美学」の生成と変容の過程を、ファシズム期から戦後にかけての彼の個人史、同時代の社会史・思想史のコンテクストの中に位置づけようと試みるとともに、「順列の美学」とフロイトの精神分析学、レヴィ・ストロースの神話学との「思考の同型性」に注目し、フリッシュの「モダニズム的な語り」の持つ意味を、近年の「歴史と物語り」をめぐる論争などに窺われる人文・社会科学のパラダイムの大きな転換と関連づけて検証している。

第２部では、フリッシュの「順列の美学」と深く関わっているテクスト群、具体的には中編小説『ビン、あるいは北京への旅』、(1945)、長編小説『シュティラー』(1954) と『わが名をガンテンバインにしよう』(1964)、戯曲『伝記　一つの演戯』の二つの版（1968、1984)、そして自伝的小説『モントーク岬』(1975) が成立年代順に取り上げられ、それぞれのテクストにおける美学思想と表現実践との相関関係、その「対応」と「ずれ」が生み出す力の場が解明されている。『ビン』から『シュティラー』を経て『ガンテンバイン』にいたる歩みは、人称や時制の揺らぎ、クロノロジーの無効化、出来事を宙吊りにする接続法（仮定法）的空間の構築、そして一義的な解釈を絶えず拒み続

ける語りの身振りといったメタフィクショナルな言語装置によって、伝統的なリアリズムの語りが徹底的に破壊してゆくプロセスとして把握される。論者は、「テクスト存在論的なパラダイムの転換」（J.H. ペーターゼン）という視点からトーマス・マンの『ヨゼフとその兄弟たち』、トーマス・ベルンハルトの『歩く』を参照しつつ、それらの作品を突き抜けてフリッシュの『ガンテンバイン』が到達した地点を指し示している。しかしフリッシュの晩年、特に『モントーク岬』で、明らかにフリッシュ自身を思わせる語り手によってなされる一人称の語りにおいて、「虚構性」から「事実性」への回帰を思わせるテクストが「順列の美学」の撤回なのかどうか、その持つ意味が詳細に検証される。論者はそこに、リアリズム的な意味での生のリアリティとは異なった「希薄」ではあるが、しかしもっと「拡がり」のある、「生きられながら同時にフィクショナルでもあり、多くの次元に向かって開かれていながら同時に閉じられた時空間」、「引用の中の生」とも言うべき新たなリアリティが開けていることを見ている。

論文審査の結果の要旨

マックス・フリッシュは、小説・演劇などのジャンルを超えて生涯にわたり文学的な「実験」に挑み続けた先鋭的な作家として、ドイツ語圏にとどまらず今日の世界文学に大きな影響を及ぼし続けている。本論文は、「私」への実存的問いかけから出発し、「語りえない経験」、いわば〈主体の内側にある「外部」とも言うべきもの〉の表現にこだわり続けたフリッシュの、作品の背後に潜む「順列の美学」を一貫した美学思想として再構成し、そうした美学思想と表現実践との緊張に満ちた相関関係、両者の「対応」と「ずれ」が生み出す力の場にフリッシュ文学の核心、フリッシュにおける「書くこと」の意味を見出そうとしている。フリッシュ研究の画期をなすといってよい重厚な論考である。

フリッシュは、一方では現代人の自我の揺らぎをその内面性の極みに向けて探求するという内へのベクトルと、他方ではナチズムの台頭を許した市民社会へ仮借ない批判という外へのベクトルと、二つの相反するベクトルを併せ持った作家であった。従来の研究はどちらか一方に偏った視点から論じられることがほとんどであったが、論者はフリッシュを、「個人の内面においてのみリアルであるものを言語を通じて描き出すことによって、逆説的に外部への通路を見出すという方法」を取った、「書くことによるアンガジュマン」の作家だとし、二つのベクトルが交錯するところに「順列の美学」の所在を確認している。

「順列の美学」という新たな視点を獲得することによって、市民社会への批判的視線とフリッシュ美学の萌芽を育んだ時期として 1944/45 年を挟む時代にはじめて照明を当てたこと、また『日記 1946－1949』、『伝記　一つの演戯』、『モントーク岬』のようなこれまでどちらかと言うと研究の周縁に置かれてきたテクストの斬新な読み直しと再評価を提示したこと、さらには「順列の美学」とフロイトの精神分析学、レヴィ・ストロースの神話学との「思考の同型性」に導かれてフリッシュの仕事を 20 世紀思想史・文化史の大きなコンテクストの中に位置づけたことなどは、本論文がフリッシュ研究にもたらした目覚しい成果である。

「私の経験はいかにして表現へともたらされるか？」という問いをめぐって、テクストの内在的な読みから出発した論者の研究が、やがて「順列の美学」の発見に行き着き、「語りえないもの」としての「内なる外部」という考想を経て、テクストの外部への通路を拓いてゆく。こうした研究の歩みそのものが、フリッシュの作家としての歩みと重なり合い、内から外へそして再び外から内へという往還が描き出す軌跡の内側に、フリッシュ文学の豊穣な空間が次第に姿を現してくるプロセスはまことにスリリングである。論者の緻密で粘り強い論述は、これまでのフリッシュ研究の精力的な渉猟と検討に支えられ、きわめて説得的である。

ただ、大部な本論文の各章は既発表の論文をもとに手を加え、テーマに沿って再構成されたものであり、こうした成立事情から、記述にまま重複が見られる点が惜しまれる。「順列の美学」という根幹を成す概念についても、もう少し論者の説明が必要だろう。しかしそれは、本論文がフリッシュ研究において果たした寄与の重大さをいささかも損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。